

いじろ

いじろいじろ

いじろいじろいじろいじろ

木村 無相

『2025年難波別院カレンダー』10月のことば

掲示板のことば

わが家では、毎年夏休みに親族が集まり温泉旅行に行きます。

ある年、旅行に行かないと言っていた甥っ子が「僕も行きたい!」と急に言い出しました。他の子どもたちの笑顔を見て、心変わりをしたのでしよう。

すると、甥っ子の父親は「旅行に行かないって言うから、代わりに一緒におもちゃを買いに行くとって約束したのに、嘘はダメだよ」と叱りました。子どもであっても自分の言葉に責任を持って欲しいという親心だったようですが、子どもにはまだ理解できません。するとじいじが「それは嘘じゃない。心が変わることとは、誰でもあるだろう。」

と甥っ子をかばいました。

表題のお言葉は「ころびころころころどこまでもナムアマミダブツナムアマミダブツ」と続きます。心が常に変わるのは、自分の都合を優先して生きているからではないでしょうか。思い通りに行っている時には有頂天になり、うまく行かない時は自分を悲観します。どこまでも不安定で、定まらないのが私たちの心です。ここでは、どうしても自己中心で生きてしまう私までも見捨てない世界を「ナムアマミダブツ」と表現しているのではないのでしょうか。甥っ子の旅行前に起きた心変わりを通し、私自身の心の「不確かさ」に気づかせていただきました。

(大阪教区教化センター)

今月のことば

清風宝樹をふくときは

いつつの音声いだしつつ

宮商和して自然なり

清浄熱を礼すべし

このご和讃を初めて目にした時、「宮商和して」の意味が解らなかった。調べると「宮」と「商」は雅楽で使われる「東洋音階」であるという。それは宮・商・角・微・羽の五音で構成されており、ご和讃では、浄土にあるといわれる七宝でできた宝樹に清風が吹くと、その五つの音階が響き合い、素晴らしい音楽を奏で出すと描写されている。

我々の生きる現代は一見、豊かで恵まれた環境であるが、「不協和音」を排そうとする働きで満ちているように感じる。SNSでは常に誰かを非難し、他者を追い詰める言葉が絶えず書き込まれる。ニュース上では連日戦争の様子が報じられ、多くの人々が今、命の危機に瀕している。共通するのは「他者を排除する」という働きである。それにより生ずるのは生き辛さ極まる世界だ。お聖教で教えられる浄土の世界は、平安に満ちていて、不協和音であっても、あるがままに調和する。そのような世界は浄土にしかないのだろうか。

戦乱に明け暮れた時代を生きた蓮如上人は「談合せよ」と教えられた。様々な意見を出し合い、時に教えまたは教えられる、そのような場を尊ばれた。他人を非難するためではなく、他者にも大切に行っている世界があるということを知る場なのである。相手の意見を論破し、異なる意見を潰さんとする世界よりも、聞き辛く、耳の痛い意見までも受け入れられる、「不協和音」がそのままに並び立つ世界こそが、我々が本当に望む世界なのではないだろうか。

また蓮如上人は、一休禅師からの「曲がった松をまっすぐと見る方法を答えよ」という問答に、「曲がったままがまっすぐなのだ」と答えられたという逸話がある。「ありのまま」、この言葉を頂いてから、「宮商和して」というご和讃に触れると、宮と商は不協和音である前に、無くてはならない音の一つなのだ。それが「不協和音」であっても、それが自然なのだと思えた。

自分中心の考えにとらわれ、他者を排除しようとする心が起こりそうな時に、このご和讃を思い出し、異なる意見に向き合ってみることで、この現実世界で阿弥陀仏の浄土を、ほんの少し感じることができるのかも知れない。

(岸野 龍之)

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』(初版) 482頁

(第二版) 576頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

(青本) 123頁

「へ知ってる？ 仏事のあれこれ」

「帰敬式」ってなあに？



〜真宗門徒としての歩みの出発点〜

大阪市 正圓寺 藤岡 照也

帰敬式とは、「三宝（仏・法・僧）」を依りどころとし、聞法生活が新たに始まる大事な儀式です。「剃刀の儀（おかみそり）」を受け、仏弟子としての名のりである「法名」が授与されます。

この儀式に願われていることは、私たちが今、この生活の中で法名を授かることで、真宗門徒として、そして一人の念仏者として、確かな人生を歩み出すことなのです。真宗本廟（東本願寺）や

別院、お手次のお寺において受式することが出来ますので、一度ご相談ください。

私のお預かりしているお寺でも、ご門徒さんの帰敬式を執り行ったことがあります。その方とは、お連れ合い様とのお葬儀を縁とし出会いました。四十九日の法要後にご相談があり、「法名は、生きている間に頂くことは出来るのでしょうか？」とお尋ねくださいました。私は「もちろんお受けいた

だけますよ。何か大切な気づきがありましたか？」と尋ねましたが、その時、動機についてあまり詳しくは話されませんでした。

後日、本堂において帰敬式を行い、一緒に考えた法名を説明し伝達させて頂きました。すると最後に「妻との別れがご縁となり、様々な方に支えられていた人生だったと教えられました。そこには、妻がお念仏の世界で共に生きて欲しいと願っている様な気がして…。今回、法名を頂きたいと思いました」と語ってくださいました。

それからそのご門徒さんは、聞法会や報恩講など、お寺に身を運んでくださる様になりました。大切な方との別れという

愛別離苦を経験され、改めて「諸仏」として出遇い直されたのだなと感じました。仏弟子として、聞法生活の歩みが始まったご門徒さんの姿から、帰敬式の大事さを教えて頂きました。

帰敬式を受けたとしても、人生の苦しみや悩みが無くなる訳ではなく、身の事実は変わらないものです。しかし、仏弟子として願われた身であると感じかされた時、お念仏によって育てをいただき、生活自体が変わっていくのではないでしょう

うか。そのお育ての中、お念仏の道を聞き開く真宗門徒としての歩みの「出発点」こそが、この帰敬式なのだと思います。



仏教マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ (243)

りようじきちつ
良時吉日
えらばしめ

